

かしま再発見～古枝編～ ギャラリートーク（その二）

歴史史料から見る古枝の歴史

～小野原虎吉と田島勝爾を通して見る地域の歴史の伝え方～

日時：平成 27 年 12 月 20 日（日）10 時～

場所：エイブル 2 階 交流プラザ

講師：鹿島市民図書館 学芸員 高橋研一

おはようございます。

古枝の歴史をお話するにあたって、古枝を代表する人物として小野原虎吉と田島勝爾の2人を取り上げ、その生き方や伝わり方という観点から、古枝の歴史や文化性を紹介していきたいと思います。



今回の「かしま再発見～古枝編～」を企画する時に一番心がけたことは、鹿島鍋島家という“殿様の歴史”から脱却して、地域の視座から地域の歴史を描くことでした。鹿島の歴史と言われると、3代藩主鍋島直朝や最後の藩主鍋島直彬などの事蹟を思い起される方が多いかと思います。何故そういうことになるかということ、鹿島に関する歴史史料（古文書や日記）のおよそ7割から8割が鹿島鍋島家の文書になるので、歴史史料に基づいて鹿島の歴史を描こうとすると、どうしても鹿島鍋島家の描く歴史像が色濃く出てしまうこととなります。そのため、鹿島市内の各地区の人々が営んできた様々な営みが見えづらくなってしまおうという現状があります。

近代の古枝村の6地区（下古枝、上古枝、大村方、久保山、中尾、鮎越）はもともと鹿島藩領だったところですが、それに対して上流にある奥山区、竹ノ木庭区は佐賀本藩領です。今でも大字は音成で、校区が古枝になっています。このように、古枝地区は2つの歴史的由緒が異なる地域からなっています。この異なる2つの地域を、どのような視点から見ていくと、一体となって見ていけるかということで注目したのが古枝の自然環境です。人々がその地域で営んでいく時、どうしても自然の制約の中で生きていなくてはなりません。人々の営みを支え、そして制約した自然環境、そうした視点から見ていくと、人によって作られた枠組みではない、自然を生かしたつながりが見えてくるのではないかと考えました。



古枝地区の景観

このような観点から古枝地区を見てみると、浜川が古枝地区を貫流しています。昔は台地だったところを、川の流れが、何百万年、何千万年かけて侵食し、また洪水のたびに水の流れを変えながら、谷筋を広くしていきました。当然、谷筋ができると水は谷筋に下りていきます。そのため古枝地域は谷筋の地域と台地の地域に分かれていくわけです。鮎越、竹ノ木庭、久保山の台地はそうやってできていきましたが、当然台地は水が不足します。

このように、自然の制約の中で生きていなくてはなりません。人々の営みを支え、そして制約した自然環境、そうした視点から見ていくと、人によって作られた枠組みではない、自然を生かしたつながりが見えてくるのではないかと考えました。

古枝地区は、浜川に沿って水流が豊富な地域と、全く水が貯蔵できない台地となった地域の2つの地域に分かれていきます。

また、浜川を中心に据えることで、政治的には佐賀本藩領と鹿島藩領に分断された両地域の交流も見えてくるのではないかと考えています。

人々の暮らしは谷筋を中心に始まりますが、江戸時代に入ると、奥山から嶽水道が引かれて鮎越堤に流れていく、さらに鮎越堤を通して下流の浜の菅原堤などにも水が流れていくことで、鮎越地域の開発が進みます。小川内川から久保山堤(小星堤)にも水道が引かれて、久保山地域の台地の開発を支えました。竹ノ木庭にも堤がありますが、この堤にも浜川から水道が引かれて、竹ノ木庭の開発が進みました。こうして、台地の部分も堤と水道という利水事業によって、人々が生活できる豊かな環境に変わっていきましました。

その反面、この狭い谷筋を激流が流れるので、大雨による洪水や土砂災害も当然起こってきます。伝染病も水によって広がっていきました。上流部、中流部で発生した疫病(赤痢など)も川を通じて下流に広がっていくわけです。そのため、水の管理は非常に重要な問題でした。このような恵みと脅威の中で、人々がどのように生活してきたのか、そうした中から古枝の地域性が見えてくると思います。

同じ浜川の流域を生きる人々のつながりを示す良い例が、中尾天満宮に建てられている八大龍王の石碑です。八大龍王は水や雨を司る神様です。この石碑に刻まれた村々の名前を見ると、浜川の水流に関係している古枝や浜の村々が共同して石碑を建てたことがわかります。それだけ同じ浜川の流域を生きるつながりが強かったのです。

このように、浜川を中心に古枝地域の展示を組み立ててきたわけですが、ギャラリートークでは先人たちから何を学ぶのかということから話を組み立てたいと思います。

まず「地域の歩みの記録化」として、小野原虎吉の文事を中心にお話します。



小野原虎吉肖像(昭和3年頃)

小野原虎吉は明治33年から昭和7年まで、30年以上にわたって古枝村の村長を務めました。地域の政治・経済・文化を主導する地方名望家であった虎吉は地域にとって非常に重要な存在であり、古枝公民館敷地内に石像が建てられています。石像の碑文の中で、虎吉の事績として、特筆されているのが明治39年に古枝村信用組合を創設したことです。信用組合は当時の人々の生活を成り立たせる非常に重要な存在だったので、同時代を生きた人にとっては、この信用組合設立が虎吉の重要な事績として認識されていたわけです。

ただ、今の私たちにとっては、もう一つ別の虎吉の大きな功績があります。それは虎吉が行った文事です。文事は文武両道という言葉があるように、文事と武事は国を支える車の両輪として重視されてきました。学問であったり政治であったり、また文学であったり、“知”によって

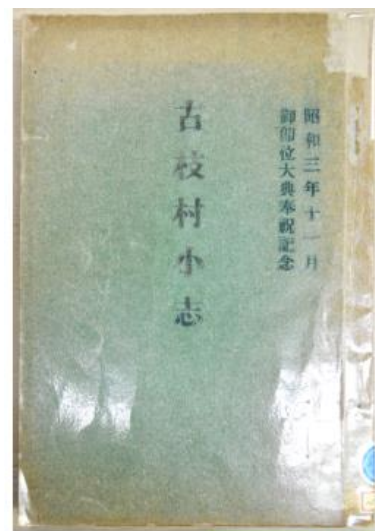
国家を支える、それが文事でした。武事は破壊したり征服することはできても、新しいものを創っていくことには向きません。そうした意味では、文事は非常に重要な概念になっていきます。

虎吉の文事でみていくと、先ほどの石像の顕彰文にも、「幼くして学を好み詩文に長ず」とあるように、もともと漢詩や和歌に通じた人だったようです。また、こういう文事に携わることによって、いろんなネ

ネットワークが生まれます。特に鹿島の場合は、最後の藩主であった鍋島直彬、それから谷口藍田など、文事を地域に根付かせ、あるいは発展させた人物を輩出しています。文事に通じていることは、地域の指導者として様々な交流を生み出し、維持していく上でものすごく大事だったわけです。

虎吉の文事を考える時に特に重要なのは、『古枝村小志』の編纂です。

『古枝村小志』は昭和3年に、昭和天皇の即位のお祝いとして作られた本です。村長であった虎吉は序文で、村の歴史や現状を知り、村の統治に役立たせるために編纂した、それから古枝の歴史や口碑（口伝、伝承）が隠滅する、地域の歴史や文化の伝承が途絶えていく、それを何とか継承していくために、この本を作ったと述べています。古枝村の歴史、地勢、史跡、それから当時の人口・教育・産業等の統計資料が載っています。古枝村の小字名を落とした地図も載せられています。昭和3年当時、わかる範囲での地域のありのままの姿を記録した本ということになります。



『古枝村小志』

天皇即位の祝賀事業として、それぞれの自治体が限られた財源の中で、記念イベントや文化施設の建設、基本財産の造成などを行っています。こうした中で、古枝村としては何をするかというときに、虎吉は『古枝村小志』を作りました。村の歴史・現状を記録して後世に残していくことが一番大事なことだと判断したわけです。地域の指導者が地域の歴史や文化をどのように保存し、伝承していくのかという問題意識を持ち、それを中心に古枝村の発展を図ろうとした、それが『古枝村小志』編纂の意義なのです。地域の歴史を伝えていく立場にある今の私たちはこうした虎吉の姿勢から学ばなければならないことがたくさんあるように思えます。

でも、虎吉だけがこうしたいと言っても、周りが嫌だと言えればそれまでなのですが、古枝村の場合は、周りがしっかり協力しています。つまり、虎吉を生み育て、虎吉の文事を支えたのが古枝の文化性であり、古枝はそうした歴史を伝える、文化を伝えることを根底に据えた伝承のあり方がしっかりと根付いていた地域であると言えると思います。

しかし、地域の歴史や文化の伝承のあり方は時代とともに変わってきました。江戸時代、家や地域の歴史はそれぞれの家の中で親から子へ継がれてきました。それを通じて地域の歴史や文化が家の中で読み書きとともに伝えられ、地域の伝承がうまくいくわけです。それが近代に入って小学校ができ、教育機能が学校に移っていくと、家の中で地域の歴史や文化を親から子へ伝えていく場面がなくなってきます。近世から近代、そして近代から現代に変わる中で、地域の伝承のあり方も大きく変わってきていると思います。こういう地域伝承のあり方の変容はもっとしっかり追っていかなければならないと思っています。何故ならば、地域にとってとても大事なことや大事な人の記録や記憶というのは、世代を経ると簡単に消えてしまうからです。

「地域の記憶」に私たちがどのように向き合い、今後どのようにしていったらよいかということ、古枝でみかんを植えた田島勝爾を通して考えていきたいと思っています。



田島勝爾石像

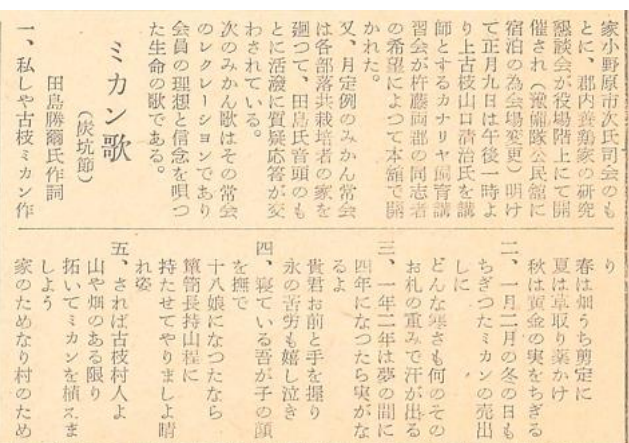
田島勝爾はみかんの先生として広く慕われてきました。能古見の南川に生まれ、明治45年から朝鮮半島に渡り、みかん、梨、ぶどうなどの果樹栽培に携わります。帰国後、大正8年から久保山で、みかんの栽培を始めました。勝爾を一躍有名にしたのが、青年団の父と称される田澤義鋪です。田澤は昭和3年発行の雑誌の中で、青年が模範とするべき人物として勝爾を紹介しています。

また、勝爾が住み、愛した久保山区の西谷には、勝爾の石像も建てられています。この石像には昭和39年に書かれた碑文があり、これによって、勝爾の概略、そして同世代を生きた人が勝爾をどのように評価していたのかを知ることができます。

勝爾は鹿島で初めてみかんの栽培に取り組み、収入が豊かになったのですが、それを一人で独占する、あるいは一人だけで実現したわけではありません。古枝地区の久保山・中尾・鮎越を中心に、七浦・能古見・太良などの地域の人々にみかんの栽培を勧め、一緒に取り組んでいきました。そういう中で、昭和27年に勝爾が作った「ミカン歌」

があります。みかんの栽培者の集会であったみかん常会で、勝爾が会員のレクレーションとして炭坑節の曲にあわせて作詞したもので、「会員の理想と信念を唄った生命の歌」として紹介されています。その歌詞は、夫婦がお互いに助け合ってみかん栽培に取り組んでいけば、豊かな生活が送れると鼓舞する内容になっています。

このほかにも、勝爾の足跡はいろんな所に残されています。一番多いのが書です。今日は勝爾が89歳の時にお孫さんのために書いた扁額を2点借りてきました。一つは「和以貴」、もう一つには「誠其意」と書かれています。この2つの書には、勝爾が何を大事にしていたのかがよく表れています。お互いを思いやって仲良くすること、そして誠意を尽くすこと、すなわち人と人とのつながりを最も大切にしていたことがわかります。勝爾のシンプルだけどしっかりした信念、そしてお孫さんに伝えたかったことがわかる良い書だと思います。この他にも、勝爾のゆかりの家々には勝爾から贈られた書であったり、勝爾にまつわるエピソードや記憶が大切に受け継がれています。



田島勝爾作詞のミカン歌（昭和27年／古枝公民第2号）

また、勝爾の功績を自然環境の面から見てみると、古枝地区は浜川を中心とした平地部分から開発が進み、江戸時代に台地部分の開発も進むのですが、そうすると平地部分と台地部分の境目にある斜面部分が取り残されます。この斜面部分をどのように有効に活用していくのか、そこから豊かな実りをどのようにして生み出していくのかが古枝にとっての大きな課題でした。江戸時代から明治時代を通して、誰もその課題を解決出来ませんでした。勝爾がみかん栽培に取り組み、周囲に勧めていくことで初めて斜面部分の開発が進んだのです。

また、勝爾の功績を自然環境の面から見てみると、古枝地区は浜川を中心とした平地部分から開発が進み、江戸時代に台地部分の開発も進むのですが、そうすると平地部分と台地部分の境目にある斜面部分が取り残されます。この斜面部分をどのように有効に活用していくのか、そこから豊かな実りをどのようにして生み出していくのかが古枝にとっての大きな課題でした。江戸時代から明治時代を通して、誰もその課題を解決出来ませんでした。勝爾がみかん栽培に取り組み、周囲に勧めていくことで初めて斜面部分の開発が進んだのです。

平地や台地の良質な水田は江戸時代の庄屋の系譜を引く家などの有力者が所有しています。多くの人は小作として細々と生活している状況にありました。それが手付かずだった斜面部分でみかんを栽培し、そのみかんが豊かな生活をもたらしてくれたのです。そのことは農家のあり方だけにとどまらず、生活水準の向上による家の改築や品物の購買によって様々な分野にも波及しています。そして古枝の地域経済や地域の成り立ちまでをも大きく変えていったのです。そういう意味では、近代から現代にかけての古枝のあり方にもものすごく大きな影響を与えたのが田島勝爾の取り組みだったといえます。



ただ、勝爾は昭和 63 年に 97 歳で亡くなっています。勝爾と直接会話を交わした方は、50~60 代の世代が最後の世代です。すると、現在の世代の方々が勝爾の記憶をしっかりと次の世代に引き継いでいかないと、家の床の間に勝爾の書が掛けられていても、この人がどういう人なのか、自分の家とどのような関わりがあったのかという記憶が途絶えてしまうわけです。

昭和 62 年に刊行された鹿島の人物辞典である『鹿島の人物誌』に勝爾は収録されていません。当時調査ができなかったり、あるいは当時存命中で評価するのが難しかったり、そういう方はこの本には載っていません。この本に載っていないが故に消されていく、忘れられていく地域の人物であったり、重要な事柄というのがたくさん出てきます。これは決して大げさな表現ではなく、地域のために尽くした多くの功労者がこうして消えていきました。

鹿島の歴史の基本文献である『鹿島市史』には、久保山と竹ノ木庭の堤の話は載っていません。竹ノ木庭の堤はこれまで本に記されたことがまったくありません。今回、奥山の方に聞き取りをする中で、奥山から竹ノ木庭に水道を引いた堤があったという話を聞いて初めて、私たちは知ることができました。この堤があるからこそ、竹ノ木庭の開発が進むわけです。勝爾のような地域にとって重要な人物、それから堤のような地域の人々の生活を成り立たせた根幹がなかったら、ここでの人々の生活ができなかったくらい重要なものが、今歴史の中から消えていこうとしています。

このような現状をふまえると、みなさん一人一人の「記憶」が、歴史や文化を伝えていくうえで極めて重要になってきます。ここに、「聞き取り調査」の重要性があります。現地に住む人たちからの聞き取りによって、歴史史料でのみ描く歴史像を訂正する、あるいは補完することがものすごく大事になってきます。さらに、その記憶そのものも歴史史料としていく必要があると考えています。

今回、この「かしま再発見」企画を始めようとしたのは、私たち自身がエイブルの中だけで活動しているのは、地域のことをなかなか知ることができない、地域とのつながりができない状況の中で、地域に出て行って、地域の方々といろいろ教えていただきながらいっしょに創り上げていきたいという思いからでした。地域の方々が集い、交流の結節点となる生涯学習センターとしても必要な行動だと思います。

地域に入っていくことによって、“殿様の歴史”として書かれてきたものとは違う地域の豊かな歴史像に出会えました。そして、地域の視点に立って、地域の歴史や文化を見ていくことで再発見できたもの、あるいは再評価できるようになったものがたくさんありました。

学芸員は各地域が所蔵する歴史史料の内容を解説し、価値を共有する、あるいは守り伝えていくためのお手伝いは出来ます。しかし、それはあくまで手助けです。やはり自分が生まれ育ち、生活している土地の歴史や文化を次の世代に引き継いでいくのは、家や区の役割だと思えます。そして、自分達が何を守り伝えていくものとして選ぶのか、すなわち伝承するものの選別基準と伝承の仕方とその地域の文化性が表れるのではないのでしょうか。

それから、歴史史料に向き合う姿勢ですが、地域の歴史や文化を伝えていくうえで大事なことは、正しく知って伝えていくことです。誤ったものを伝えていくと、それがまた一人歩きして事実と異なる歴史像が出来上がっていくこととなります。そのため大事なのは、既存の本が必ずしもすべてを網羅しているわけでもなければ、書かれていることがすべて正しいわけでもないことを頭において、典拠となった歴史史料（主に古文書）に立ち戻ることです。崩し字を読む能力は5千人くらいしか持っていないとも言われています。世界各地域を見渡しても、100年前の自分たちの国のものが読めなくなっているのは日本だけかも知れません。この国は戦後、他の国の言葉は読めるようになったけれども、自分たちのおじいちゃんやひいおじいちゃんの書いたものを読んで、それを理解することができなくなっているのです。本に依拠するのは危ないけれども、古文書を読むのは難しいという中で、地域の歴史を正しく知ることが非常に難しくなっているのが現状です。

このような状況の中で、どのようにして地域の歴史や文化を伝えていったらよいのか、今後も皆さんと一緒に考えていけたらと思っています。

本日はありがとうございました。



床の間コーナー展示風景（第1期）10/1～11/3



床の間コーナー展示風景（第2期前半）11/5～11/17



床の間コーナー展示風景（第2期後半）11/18～11/29



床の間コーナー展示風景（第3期）12/1～12/25